

りの下女共を召抱へ候様にと、御申付らるゝを、近頃浩氣なる御申付と、世上にて沙汰いたしたる砌なれば、御評定所の給仕人、茨原町の遊女共も相應の義と、板倉殿には被致間敷ものにても無之事也、

〔近代世事談綺時〕住吉遊女田植

堺乳守の遊女、住吉の御田をうゆる事は、いづれの帝の御時なるか、宮女に悪瘡の愁ありて、終に宮中を出て吟ひ、乳守に來り、遊女の家によしなはる、此病を住吉の神にいのる、ある曉神託して、諸人に面をさらし、賤しき業をなすべしと也、よつて御田植女にまじりて、毎年これをつとむる、悪瘡ことごとく愈て、顔色元のごとし、此例を以、乳守の遊女、植女となるのはじめ也、又遊女局などの暖簾に、紫の耳を付る事、乳守の外に出ず、これみな故縁によるといふ、

〔倭訓栞計中編七〕けいせい略○中 源平亂の後、平家の侍女等、下の關門、關赤間關などにさまよひ、

世わたるたつきもえらざれば、あそび女となれりともいへり、攝州播州等の神社の祭祀に、妓女を用るものあり、楊升庵が集に、漢郊祀志、郊時宗廟用爲飾女妓、今之裝且也、其褻神甚矣と見えたり、

〔一話一言四十五〕一言奇談

友人遊女を迎へて、箕帚をとらしめんとす、ある人諫めて曰、遊女を迎へて婦となすは、溺器ヲカハを洗つて飯櫃となすが如し、百たび洗ふとも潔とせんや、

皓々乎猶蛇目、以灰汁一洗

男娼

〔松屋筆記六十六〕若氣ニキ并男娼カカダ

今世のカゲマ、垂髮の事を、むかしは若氣といへり、若氣勸進帳あり、文明壬寅の冬の作なり、其文